



鄒業

三

連

連



特別  
14  
696  
46



目錄

一 藝田官小雀

天和元舞内 神谷長藏

一 刷毛二序

神谷長藏 有巴散撰

一 有也無也之関

芭蕉の撰

一 木曾道之記

横井也 有角 真跡 細野也藏

一 草枕

芭蕉の撰

一 芭蕉紀行

寛政六

696  
46

目錄

- 一 右也無也之圖 芭蕉翁撰
- 一 木曾公之記 横井也右存其書以代之  
細甚忠陳其至藏
- 一 古十抄芭蕉撰 池九
- 一 是之韻之之記行



秘 古  
信 記  
の 女 子 の 手 紙

秘 古  
信 記

善言の文庫

幻住庵俳諧有也無也關

昔花の本小にひて神代ハ言其和歌  
を初め代々大和歌の姿と視其凡  
神を分てよふは俳神を定まらぬ  
御借是能のあと終りて喜小談笑の  
姿を影を裏り深清乃川次合言句  
法也俳句ハ上子此虚を云々あるが  
深といふ金云と解く虚を虚之  
虚と字より綴ると是と解 実と虚



示猶多と是くは実とと實とついでに虚  
疎虚と致つては元徳の道ふあつても  
正風ハ虚實の可ふ致してさうも虚  
実なり止りて是れ家の秘訣也

一段の切字は事ハ十八字ありて  
和交して連なり其沙法はれと何  
故めと其形と縁をれは意法に知を  
是津古員と誤りて云偏の徳徳の徳  
の字を漏り出れと人々好半と覺  
きり忘れも勅後を以て漏る書な  
れと是を古実の例として其徳の  
字より毎用と致事也此所ハ對  
て海をぬらうは意を以て是を有也

舞也の園と名付ゆりのり文と捨て  
是は月もさう唯象のふれよの人  
此門の人論云論れ安をさうは中曲を  
合さるれ心中に世と捨る年なれ  
口曲を他門のりて心曲を正風也能  
者り能月ひ月此花のつらふは  
月此方ふ其云葉也さむ星白切也

飛音

十八躰引本系

挨拶切 いりううい雷るさうし所を  
右挨拶を地ふ對さるの二つて接をさ  
とれし接を地とていりううい星天也  
雪見おれ修合地さきて然然上下の  
云葉まま家の屋さそを以て一句の切  
かきこら星挨拶也  
申之切 猫の恋やむ時園の種有  
衣箱の恋やむ空明や園の臘月星を

唐後ハ一七押ハ物ハ七文字の中ニ  
 正云云云云ハ皆ハ紙申の切ト云ク  
 自他切 人ノ家ト買キ我ハ年忌  
 太月他ヲ物ク皆月代ヨリ今  
 乾中事 隔リて人ハ家ニ帰ル所  
 隔リてハ 解テ自他也  
 世名切 咲礼ハ柵の中ヨリ柵  
 太無名ハ一ヨリ立所キ何ヲ切字  
 とも用ラレキハ吟歌集ハ何ヲ無名と

以上其公ハ咲礼トモ咲礼ト云ク一語  
 と云文字ハ至テ一層の句柵ト謂フ  
 釋ハ落ハ他名落ト云ク一語ヲ礼と  
 心ヲ隠シテ世名ト礼也  
 玄妙切 春モゆハ氣色調ハ月柵  
 右云云云云也妙ハ心云云及次  
 詩ハ云歡見ニ庭前柵ハ松を云ク一  
 語ハ心ハ念ハ是玄妙也  
 二字切 秋吟ハ子ハ心ハけハ風花子



右親を未来の備ありては二ッ言  
を冷し親をむけや下知ふしそ  
親は此親二ッ言切といふ

三字切 子昔より吾は所を成むらん

右子昔より吾は所を成むらん  
嘆息親をのめや凡そ人の性して  
切と所し 省しをを糞とつよ  
多切まは一此未来を切ふ用也

二辰切 撰式小町り姉が名をさう

右撰式小町と又定めの二ッを成ありて  
いふそそ花撰小町り姉が名をさう

心切ありて 是二辰切

三辰切 眼ふき茶山部公物解

梅若草茶山部公物解

右目小耳小口小といふ類を立文  
合して三辰の切となす

尔也 柳の花小昔は為料理のる

方小鳥一ハのれ館病の強く余りて  
一向此の冠へを病をふと押してさうもふ  
乃能名みとととと廣くありてあり病を  
桐の年小鶴鳴なる塚の門ととと数句回  
ととと 春くとも づる 病をととと  
右に切をゆふくととと余悟をととと  
字小合て下れ病をととと病をととと  
ととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととと

大鳥一唐詩の松花よれ臆ゆて

行春を遊江の人ととと

右大鳥一ハとととととととととととと  
知るととととととととととととととととと  
下知切首すけ後及殿さう角力さめ  
右下知を写け云へぬれ等の数れを氣色  
小して切りりる人高竹の人小對して病  
事あり

心切 秋風小打を思へと葉の枝

右心象物くふ穉くとりた秋風の冷

—さふ仙居の葉の枝我あくしてをりさ  
かうら心羽あけてさうと膝しき是心枕

ゆく地乳あ—

勺讀切 志進及ふ扱の中山を涼め

右勺讀を未來の扱を現を不丸越

— 字を扱ふ指菊して吟菴等—

扱ふ少し情あを勺讀の扱とり

押字 何乃木の花もさるる自ひ式

右押字をそのとの扱ふ給—き切

是はとめて押一下めてうさ勺切たり

抱字 夕顔や睡をみくれば瓢の形

おけや切とさう— 又文あまの云扱あひ

無して是は只らあを林と抱勺

分さ— 或は浮とめて切れ

重字切 葉る自七重七雲仙華八字扱

扱重字を鶴扱ふ若野ううやめくと

云葉重右代を重扱の扱といつり

在平八の切字と振とてい余をさし  
ふ多れとて口は

○發句豊横并狂句仕立極と事

狂句 五月多をよ集て果一見上川

傳云口中曲を合するある心中曲を  
捨ふるある狂句あるなるは横の表  
のとききけり口中の其之なり  
とつる方の中に出るけりもあつめると  
上座より狂ふ甚意味ある是後句也

云と川と軍馬と曲流ハ一句の中ふくと  
表ふれり其五義傳の也也此句ハ  
云ふ事ありて此味を一一狂句傳  
其外表立時皆是振詞なりとす  
本家とす

まう初くは何と種をサ洋北  
波のうねく北ひさげらん

横句 狂掃也又ハ茶屋をふ掃  
傳云句解作りの時其上のみ文ある

香勺此歌を歌へ心持めて流を合  
序小曲の心を包み押おして押(纏)  
極云ハ

薄の初と終とをさうあてふ

ねの志をうらん波のさう

如比五音の篇序題曲流と云くは  
けそと云ふ限りは類例しても常  
の句ふる中し五音と値つるを  
程の辨 京橋し飛見の海を七音

傳云題を七文字ふ並上下小篇流と後  
一篇小序と合し題小曲を纏うと程ハ  
乃句といふ如右傳ふる句のさふめ  
曲流序の伊題も纏ふるハ作者の志  
屋ふらうと極云ハ

村あぐに生さるる人并乃

ぬのう結く 初と終とを

○波の情の事

香勺 年の尾也流の方を浪志まひ

年此尾や鯉の尻ハ喰ふ海ひ  
平句 海をまぐのを神を御城城

神をまぐ子と神を御城城

おまを御形や尻のまを喰ふまは  
何を喰ふまはしたるかまを喰ふまは鯉の  
尻とまを喰ふまはまぐ子と神

より極月とのまは陰陽のまを喰ふまは  
情とまはまぐ子と神を御城城  
安情の二ありて同じと月ありまはまぐ子

るこ平句れまを喰ふまはまぐ子と神  
二十年の切を神を御城城の尻を喰ふ  
とや 鯉年負れ口まあり

偽日鯉と大鯉  
鮎年負トイフ

○上座實正年

虚 糸切て雲とぬりり鳳中

實 糸切て雲より落る鳳中

正 糸切て雲ともなる鳳中

右虚實と非とて正を是とて此  
城は虚實の男ふ物とて平句の正脈

○不易流行し事

不易の句 古比や蛙飛ぶむ水の音  
 流り鳥 京流も花見の社あは七糸  
 不ふ易流りのもふ連地とまにまを  
 ちりへ多し古比をふ新不易の廿廿  
 本ふ及るは晋子と流く山吹やと備く  
 ちりへ多しあと言と山吹古比心雲流り  
 と流りへ山吹や蛙飛ぶむ水の音と  
 とは流りの句之流り鳥の二句ふ准

大京流もよしくらあはし

○お夜句みあはし事

香 卯の花やうき柳の及ひうき  
 傳云柳の句とあふ卯の花の垣あり傳  
 あうりて雙柳とつる次あてこれ垣根  
 小對よる西香や  
 奇 垣朝北齒並にをそし葉の柳  
 傳云をそふの句と古き葉の柳ふ葉  
 けり垣朝のをそふといをぬる

つううそ記姿風情をあらはせ是室之  
後 ころかねて兼備を中々郭公  
得云毫もくも人しと知るに以てのめま  
直りくきくすとすまのむを四方ふ入後  
て夢人陽なき雨を我うひひ何と見  
るるは是梅也これをもす人ふ高下何と  
いふれ

寄 蓮葉よすまや侍也の初便り  
傳云子の初めれめてうれは又長き侍

勢海危し歌は今よりあふ蓮葉と我  
下不伴舞れ初便りと侍りて海危乃  
安玄妙ふ初めは是寄也

志 埋火や海の底に老るる音  
傳云是は花咲老人の志日小我舞の端  
まらりや古所の西と感さるめは折  
埋火ふちいひて直去るとも表は感  
海夜史ふ老黄ゆり斜埋火是うも海  
の底に老るる音 これを志の句斜といふ



之り〜 中ありて 煮えつたれ 煙火の匂と  
心ゆく〜  
右の匂み雨をまゝ入る 初なる人の見  
ゆ〜 見雨空ふしで 能く 眠ふ及ん  
ぬ〜 さおと 心は 亦曲り 他は 二ありと  
節〜 まで 居られ 兼て 押分を 居  
柳〜 止め け 押分を 居ると ありて 柳の  
花 振らん〜 心 中 亦 繁花の 氣  
分 あり〜 申 他 あり 名 月 也 水 水 了

字よ七小所 けり 折之 日 有 候 じ たら に対  
石 山 の 高 じ り よ ち 聖 國 の 流 の 風 流 を 見  
畫 さ せ と う へ 出 候 へ 取 中 畫 の じ ち  
ある あり ち ち 中 人 流 け あり 候 と り と 七  
小 河 の 産 地 と っ ひ ま け たら 也 化 法 の 見  
上 あり 多 の 心 を ありて 座 の 匂 亦 色 一 中  
七 文字 と 俣 り あり 色 象 浮 の 面 亦 西 施 の  
合 候 也 あり け あり 色 施 あり 古 事 之  
象 浮 の 色 あり け 候 眠 じ ち 京 あり 色 似

たゞらんう西施う眠りハと足海め右顔の花  
ハ其色ふぬ又名を——者く世人の深は谷飲  
の花の顔向めて西施色を句地也

○夜句八辨し事

人毛足ぬまきや鏡のうゝの梅

幽玄辨 やうそ死ぬまきハ見く尺牒の色

方泥や梅花とさ水のお水

梅のふ小粒やとよまの梅の花

有心辨 猿川は猿の小神をさぬさふ

金屏に松の梅さやみあり

うさひまそ宿るはや夜の花

無心辨 赤くと日ははまきも 好の風

其まやはまきの春う夏の時

梅の香ふのつと日の出らぬ

悠遠辨 柳の枝は消りもや鳥の川

あそむや岩ふ雲たく先

風貌辨

ひらりとと秋風をいふも良流  
象河のあや西施の合飲のたふ  
糝結し行もふとさむいん  
みりぬとまをあふとれと川

風情辨

涼しさを秋宿めて秋暮  
このよき時とひい思さふ  
ゆきのむくけそふ冷たかり  
練履ふくを枝の竹葉をふ

真言辨

風曲辨

あり真のいありたて真英流辨  
京橋を花見の座を七去風  
まくとまのつとまののを番椒

か後八辨の半身月化の句辨何と

足定くそ類向と改編ふ及るる  
鏡や外ふ二十辨ありつるありと  
皆は八辨を分川れ来辨なり  
後ふ小編ありれ持菊阿り口傳

奉納傳三品

正親句ハ云此法はこれ縁をりて仕立局  
法やな安れ傳ふ同

まづうまいまの山北草の歌

ま月とくまうは今のうら

俳語

何の年の花もさういふひ

如比綴々事之又言親句ハ五音十声  
乃多ひととて綴々是と申安れ  
傳ふひと。夢をそよふふの押  
麻子かのくゝんあるむう一也く系

俳諧

松風の句とてはる 漢此文

色つるるん 漢此文

むう一を款ハ求るお換りて

正陽合辨時ハとて文字を書き不端  
下と連するも端ハ又とを連する  
して下を書き不仕立つ事ハ何の是  
ハ一句ある時の事を知りて  
標ハまといふれ流る  
右三品ハ正陽法楽の正陽を新

襟後想かた文眼移流は香色連色  
あはれを菊ひも光連おまの六首の格也  
て端りかう一若入うりも終くむと  
付

脇三

樹をよけりるを庭乃友すあ  
秋とよけりる樹根の指一杖  
尚云ぬのぬの時い脇を横は仕きる也

眼を娘のまとい一伏親の懐を離れを志  
毛其家をとるるうりあとい一乳是捨  
穂新れ教へぬぬおれささるあを服  
おれい一ぬぬおたりぬ根お仕きる也  
むぬぬこれ月月のあ子とるい一二月  
おつうりとのハおおぬぬあつてまは  
ぬぬの友や雀といふ親より樹根の雀  
の雀西とんぬとる根のゆ一杖と根  
端とぬい一まのぬぬぬてぬぬを捨

十あるものを七ツ取一筆連珠三ツ取服を  
調り申す一

一服子小葉取の事ハ般句たりたり  
或等の取ありありと文字取  
取たりありありと推取之喜神三あり  
是ハも子字取や中  
しるひのやと三ツ取は合持の脇ひ外  
二の取ハ定の字取あり一頁字ハ後記  
く取ハ傍ありと一帯の取ハ小取用の  
字取といふ一書安くはる時ハ本式十

百類見合と宗匠の計ハ取を申す

葉小文ハ被不碎ハ取の所

柳毛吹け風毛あひけは

又 取花毛小葉れりし心

四ツ花咲場ありあそん

又 遊をとりを構ふは取物あり

時取毛柳を一本

○弟三振

友蔭れ取

月入ると夕引のわらぬまで

傳云申三冬を極く甚伺まし一等は  
他家の士のまじり服の下をふまじり  
まじり極くまじり侍の極のむと場と  
やぬぬふむ伺場西のむとぬと  
ことまじり秋の季ありまじりまじり  
春秋三月ふ後ものふとくむと  
月のぬぬふ晴月の申三ふとぬと  
まじりまじりまじりまじりまじり

申三冬一極く甚しう候もあま  
ぬの時を申三と字ぬとまじり  
あり申三冬百顔ふ十折の極ありて  
一まじり極の極極ありまじり  
まじりぬぬとまじりまじり  
名ありてぬぬとぬぬのすきり余の  
まじりぬぬ事あり十折の極あり  
まじりぬぬとぬぬとぬぬとぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

あはれや。ぬきぬき文字の下小抱。字と居  
七文字あて押。甚くをなげうらむ。扱  
ふはさうく。一字ぬいお小口傳あり

勝月 杜若 金吾鳥 郭公

わやうれ京物あてぬく。これみ字一  
とつて傳てあはれふ。ふふふのあは  
このと居の句とさるる

蝉をまき定くぬ鳴所  
ひねきふ芦の隈あり

麻吉の夢の山より程遠く  
我が家と存りふを此廣く  
狭む物を以て存りふを  
分別の蔵うあを極う那  
唱うこれ響を鈴を松虫  
故ううう鳥を小田刈はあはれ  
右身こめてあはれあはれ  
お定めらるるあはれあはれ  
合抱押の身つうき新ハ古式と新式



伏を記を惣て一向北面振取向中を以て  
其の字と才とありはとつひとの字と  
とほと纏らるる才もらんぬの也  
又ひの控は古式小保るれ為あり  
庭崎の松小三種の記ありて取向中  
二平向の中分り也

庭崎の松は花より彫りて  
かうさきの松は其れは勝りて  
辛味の松と其の取え後也

○附合八折之事

第一 使乃其のと約を  
其一 貞向と一貞此隙と約ひ也  
其場 板の写を鏡のこころ奇幕す  
時分 其りこも身安と後身  
時分 清流まの例小涼かありの  
其象 一西より西の儀也  
親相 記念とはとひうけあさう記別也  
侍 宗聖の機場と能つ登るる也

時宜 之は甚産甚時の時宜之體句引  
つこーハ八辨ハ悉く厚ふを及ん原句面を  
分明也但一面叙の事七名少名云  
叶りて兒毛の之実小を分別の場而の分  
別といは能く古事此後を元合  
しとよめ

○附合八辨七名

有心 系り少毛下向少毛毎りして  
とまりの時めく毛こそちて出集合

是を有心付といふは是前句ふいふこと  
其辨るまの付ふて安を脱りしはあり  
而の句辨く下七文字あり有心のこと  
と合めり

拍子 上戸流の寄れを交る毛知ぬや  
しとよめくともを折おたり

是を拍子といふは前句おつと方而を付  
し其安を合を唱と時を交るし自  
然ふ自然と名もやとすしはなり

あや 狗子といふあゝい  
色立 赤坂の若も折るゝはあやう

知らぬやういふは 白蟻虫

星と色立といふはあやう白蟻と色立  
此合もあやういふはあやうのあやう  
けさ散志ひてあやうあやう百韻  
一あやといふはあやう

起情 雲霞毛出方程の日あはれ

長風小碎りもあやうと船小あやう

星と起情といふあやうは情れもあやう  
あやう情れもあやう常船小碎りもあやう  
は長深とあやういふはあやうあやう  
歌いして二句一あやの句作とあやう  
一あやといふはあやう  
あやう 情れもあやうあやう

是を見よ時あやうあやうも改て

是とあやといふはあやう情れもあやう  
よりあやといふはあやうあやうあやう

はる解く自代を本解若ありといふも  
あつた後りといふは時をわかれ  
はる事毛何なりといふかふあつた  
大に衣とりといふは後の付合をさす  
付合といふは甚だ編む時のこと  
惣若 一代の料にかいり秋の雪

はるつくとある運の實の事  
是を惣若といひ又會款といふは  
谷を自白自若のこりて會款の前白

を秋といふは二白一人のあつた  
つり是も折紙のむつと後、来る  
時の折紙と知まつ

通る 幾多の毛のさけたるを  
いふはつらつとあつた宿引

は付合の神通るは是は會款のあつた  
といふは強人あり通るは一白よる人  
てあつたといふはせんは通るは  
の趣向風雲を暖のれり時最神紙

のちあて將く付て敷一、次に後原故に或  
自猶ある向く會釈道句のうらりり  
先師を風俗あり物心の人毛と地金  
事ありん其引句

加美草の社をよみ中一なり

○附合八種し將句

一字流形かけ合の意ふ日初と定めり○  
半分焼てやまむ田糸  
いのかちを將成のすれふは建のり

やうの吳名と捨り一服

意將の附切 葉の梅いりく吹れり  
名しこの勝といふことや

二曲の附

何となく夢のとりし交り  
空みて世を別が祖又をめて  
小町舞をよとれらんらり  
梅のの中ふ名と死らり  
拍子木をうたえと物あり  
庭ふよと細むと下百姓

古精の三殿の付きあうれ安をいん定め  
此乃のひあうれ、西海付り申す一之  
彼宗繼の安をいんもかきつゝと云服  
子のまんととれや、復の涙水といつゝと云  
口先の俳偈とて、尚元祿の新式あを甚  
いむ申す七名を八折の流りひ方めで  
精句を八折の精句あれ、自然ちた  
め乃句他あり、下公あは折の廊ふあう  
西を安う句他をいんも、安をいんも指す

山部公孫之れて、是ハ難あり、今時の付合  
多くハ、はた二の風情を以て精句とす  
く小町とて、下百種毛地、此風曲の俳偈  
あは、常年の附合あは、地の俳偈あは  
精句と云、乃つゝと云、まの也

○俳偈五花と口変

花梅と申す

道くく、乃小町あけて花梅  
古梅の花也、花梅く、屋上太町の引合

小牡丹を阿あこの花と名は我高指  
乃花よりして花様といふ所は花老極極と  
いふをあらうししつとを老極といふりし中  
ありし法ありて一山一繩とありし花  
をえ後したる時の事なり

附合一本極とす

糸極版一をいふ小咲小なり

右付合小一本極の本細川法本より  
極して花咲先糸は變りし法正傳あり

いふも其後しつに菊の毛ありし門人  
去其より猿蓑の草も末の花を畧  
して被傳を記しるありありし極一  
本の時はは咲く所を我を其合といふ字を  
記しよは是正花小をいふあり  
亦越花とす

みより一野ハ常は雲より其色の色

右付合花の定産の一二月あり水仙らん  
花なりし老野極等ありて花老をた

時不定府の花はつる故多く花ありと執  
筆は許さるる事と志りし事人言位の據  
あつたはれおまをこれいふるふ及ふるあこ  
いふる也其時を説くのとく結ぶ花服  
毛妻の句を付し  
月れ名も花の事

文科や書つとつた花の事

お月の名もつる人言は花なりと書く句  
飛つる事多し家も大なる長次丸は

片帆傳ふ毛多く其場を并ふ花も月  
を祿もつる神もよく事とせ文科  
も月名の事あつて風毎乃たあつた書  
る海もは祿も花の書なり月の際と  
変化して神光の書も事をもれり  
一まふも仕多り時り初書なり月れ座も月  
あつたつた花の神あつた男常我書の  
よを月ひを以て作り書の月ハ  
り〜次もは花の神と月のたのふいひ



つる新よそ中の花より月捨るさる  
つる

花小梅付る事

唐崎の松々花より掩めて

山無梅とさるるさるる

花小梅付る事  
あよそをひの花を  
聲花嫁花うらなもあうの家梅山梅は  
れをつま友と花の時梅貝梅朝梅人  
あう他と梅や梅うらな又月

雑の花は事

わひうさの較は花よりさるる

河野やうよそののわやう

右雑の花は秋移りなれあるさるる  
お仙ふ八句目より月秋と句他を  
十一句目の花は及ひるさるる  
季とすこし初やとすは雑の句花  
はや一花うらな三句去る季集とさるる  
冬や雑の花は及ひるさるる又花嫁を聲

元祿元年のことはあれはは是雜正花也  
甚だ付し時らて花と云

他諸月之傳

一月花を一月の初めてをきし其座の  
宗道切も又ハきし人等のする申なり  
月ハ一月ハ一ツ七月也引ある事  
子細あり百類ハ一月はと云ふ事  
せとも極したる申ふありは神家の月  
まゝしてこと知すいり

一月花を一月ハ仕きる時ハ又きくふ事  
換ふ事ハ一月の座をわけて一月  
はるふや甲乙ありてハ月花引類  
と云ハ一月ハ一月ハ月花と云  
いふは一月ハ

一月短くまてを長くとるあり  
一月の事ハ服才三すそふ事  
月あることと云ハとて室町の外ハ用

夕張ゆるさ候

一月あふ接なくぬの句ありと出る時を待

月色たる月とものを接する事然に

一折越の時刻ある句ありは良の夜はを

扱のみ事をとりて事あり

一夏み物にの月あはの字をとり

一月は意を結ひ若水を結ひさる句に

ふ一ふととる

○七夕傳

星合のあはれ句小月紙付り半此大なるを  
月を重く星ハ輝々れとも一扱の祝詞  
りて出る月の出る神ありと桐葉に

傳

星ニツらうや露のこらひ合

あしをりふをみ新

又七夕ハ重く深毛小盃

越す垣をとりぬ桂男

○月次と月の事

海無の月を輝り墨の此情もなく  
さあまき定座をふりて半か  
作名切者ありて其意を為す時ふ下  
よふまゝあるとあるべきなり

昔回乃波毛志如葉のつと

六月を汗を一夜のうちにこそ

月不常事

一 月不常を詠ひ又ハ常を付りてまは  
支那より先ず移す所ののなる也

管領をて月不押きさる極よき

岩隈を月不波のまゝなり

孫の播磨乃孫 三日月

○名所前後事

一 月不更科花下芳野と付りて半な  
れ字派は茶然回りしをまゝに付け  
行もよらりしは昔傷ありての原酒  
やうな

○本式表十句事

一 表十句ハ十百韻の大数ありて表す

これあつちの事と雖も神祇の  
爰の小神祇の撰歌教述懐恋等の  
爰の元原何一如と一若の爰の六  
身之小神祇自不恋花小歌七歌等と  
時の言ふ見在強く一好云ハ

松歌一とくしあきさるみを建 去來

澹面白海らたうくれ 評六

初こはさる小神を撰ひてまはる 芭蕉

長い梅城を四五の月 曾良

吹勝れあとい躍の身丸く 千那

格中し押てのり神け 兼

瓣網子と掃を喜れ離れ子 玄

編笠強り一今何由一 兼

神明の花は朝ひを神く可也 良

とさるれと地を報也 那

力元祿乃新式室因有也むやの関ハ首の  
能人智ずあつちの妙く二家の人等あり

そのも無傳後のおとくおとくを  
清くさるるさるるれいあか  
有也無也關終

現知住居柿三世主人  
在判

世り何人何あま中お書つりも書つり  
玄書ありといふこととさるる人さるるなり予も心成ら  
は字を正し合刻せんと言書書多し  
利あるも後書不巧はくわむやの書人何ん  
か入せしものあり  
燕子心

明和元甲申秋八月

通本町三丁目

江戸書林 西村 源六梓

堀川通蛸茶師下町

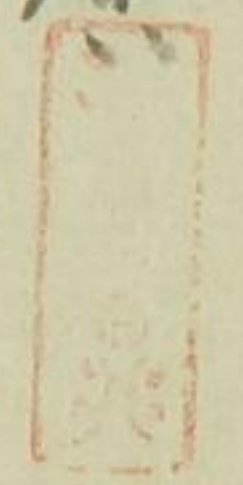
京都 同 市良右衛門

心斎橋筋順慶町

大坂 柏原屋清右衛門

安政五年九月  
鬼屋屋右借坊の同月  
廿有一日迄終

玉廣



本号道の記

延享二年  
乙丑のま

若き者よりひきりていふは、  
しほりかたの物ありきと侍をうらなひて  
今もかゝる人少しあるま

卯の花の中ふううぬ首道

年々なるは、  
心ゆくゆくいふは、

麦の穂の穂は、

わしは、  
まじりあひつゝ、  
さるる城は、  
かゝるもの、

○



さすきんぬわがこゝろの及すうつわのそえらぬむ  
あつひのしんらうしんすこしやまらぬのこゝろを  
さすきんぬわがこゝろの及すうつわのそえらぬむ

我のこゝろをさすきんぬわがこゝろの及すうつわのそえらぬむ

そを夜上尾よりかゝる松谷をよま車まの傍をわきよる  
あつひのしんらうしんすこしやまらぬのこゝろを

松谷も早き坊らやうつわのそえらぬむ

七のころのこゝろ

そをわきよるしんらうしんすこしやまらぬのこゝろ

あつひのしんらうしんすこしやまらぬのこゝろを  
そを夜上尾よりかゝる松谷をよま車まの傍をわきよる  
あつひのしんらうしんすこしやまらぬのこゝろを

懽傳もやうつわのそえらぬむ  
八のころのこゝろ

懽傳もやうつわのそえらぬむ  
八のころのこゝろ

懽傳もやうつわのそえらぬむ  
八のころのこゝろ

懽傳もやうつわのそえらぬむ  
八のころのこゝろ

何事もそのまゝに申す所を

九日校書

御覧の如くは申す所を申す所を

九日校書

此の如く申す所を申す所を

九日校書

九日校書

此の如く申す所を申す所を

此の如く申す所を申す所を

九日校書

此の如く申す所を申す所を

九日校書

此の如く申す所を申す所を

竹の葉のすかか... 山... 竹の葉のすかか... 山... 竹の葉のすかか... 山...

吉福... 山村... 竹の葉のすかか... 山村... 竹の葉のすかか... 山村...

祖... 竹の葉のすかか... 祖... 竹の葉のすかか... 祖... 竹の葉のすかか...

臨川... 竹の葉のすかか... 臨川... 竹の葉のすかか... 臨川... 竹の葉のすかか...

竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか...

竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか...

十三日... 竹の葉のすかか... 十三日... 竹の葉のすかか...

竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか... 竹の葉のすかか...

五日七の如きあり  
あつる自家より名作の試考あり

是ハ横井也右衛門の親皇の山冊を記すの如き  
忠傳先生より藏するに安政二酉辰年二月初五日



草子  
枕中  
一  
完





西廻りまゝの船は船に木をたぎらせしむる  
 正の事白の事かかへんかかへんかかへん  
 かの後のはたへんのねをのさへんかかへん  
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡の凡  
 乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃の乃

かしこいのできりまき

十里の遠きへ遊船をゆきまじの文月下海何と云  
 世に昔の人林とすなり自家里の秋分江上  
 宿屋をいつて風の色を何なげし

此の道へとちいさな舟ありてあをりなり  
 秋十の勢部をゆきまじの文月下海何と云  
 空山をゆきまじの文月下海何と云

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟  
 常の常の常の常の常の常の常の常の常の常の常

深川也昔昔と云ふなり歌  
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟



この川のお瀬はわきんたすいずの流をたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは

なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは

なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは

なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは  
なまの命はすくはるゝ山にたのむるは

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

馬の蹄を踏むは夜の中

みきりぬるは夜の中

みきりぬるは夜の中

みきりぬるは夜の中

みきりぬるは夜の中





昔を念ふにわが身をば後世に傳へしは清水の昔かたは  
あつたてふまじきことぞや

霞のうららかに霞のうららかに霞のうららかに

若菜は秋葉の白きあはれをばかきくはばかきくはばかきくは

流るる水は身をばかきくはばかきくはばかきくは

吹斜のあはれをばかきくはばかきくはばかきくは

山原の年経く若菜の身をばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

美朝のうららかに似る秋の風

秋の風も似る白きあはれをばかきくは

大喧嘩のうららかに似る秋の風

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

冬牡丹のうららかに似る秋の風

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あはれをばかきくはばかきくはばかきくは

あつたはれは梅の香も

若葉の風は

折る木枝の芽は竹舟に似たり

昔花火の時

市人よはるらうの雪の傘

縁の人

馬をこころに

海をこころに

海をこころに

ら夏よあそび

年をこころに

年をこころに

山家

誰か

さう

水

氷

水

梅

梅

梅

梅

梅

梅

梅

手傷み花を擲りて

水にまきこて身を洗ひて人なき

いづれゆへに乃中をせしむれば

伊豆の山越ゆるの葉ついでに

秋のやうに奔りてまはるるを

花の道ついでに尾張の海を

まはるる

いづれも徳を信りん

比治りてあまのいづれも

年終りの物にたふさぐ

心代りてあまの

やま

あまのやのやを

杜山とれ

白あまのいづれも

二つに相葉ふと

りて

牡丹葉の

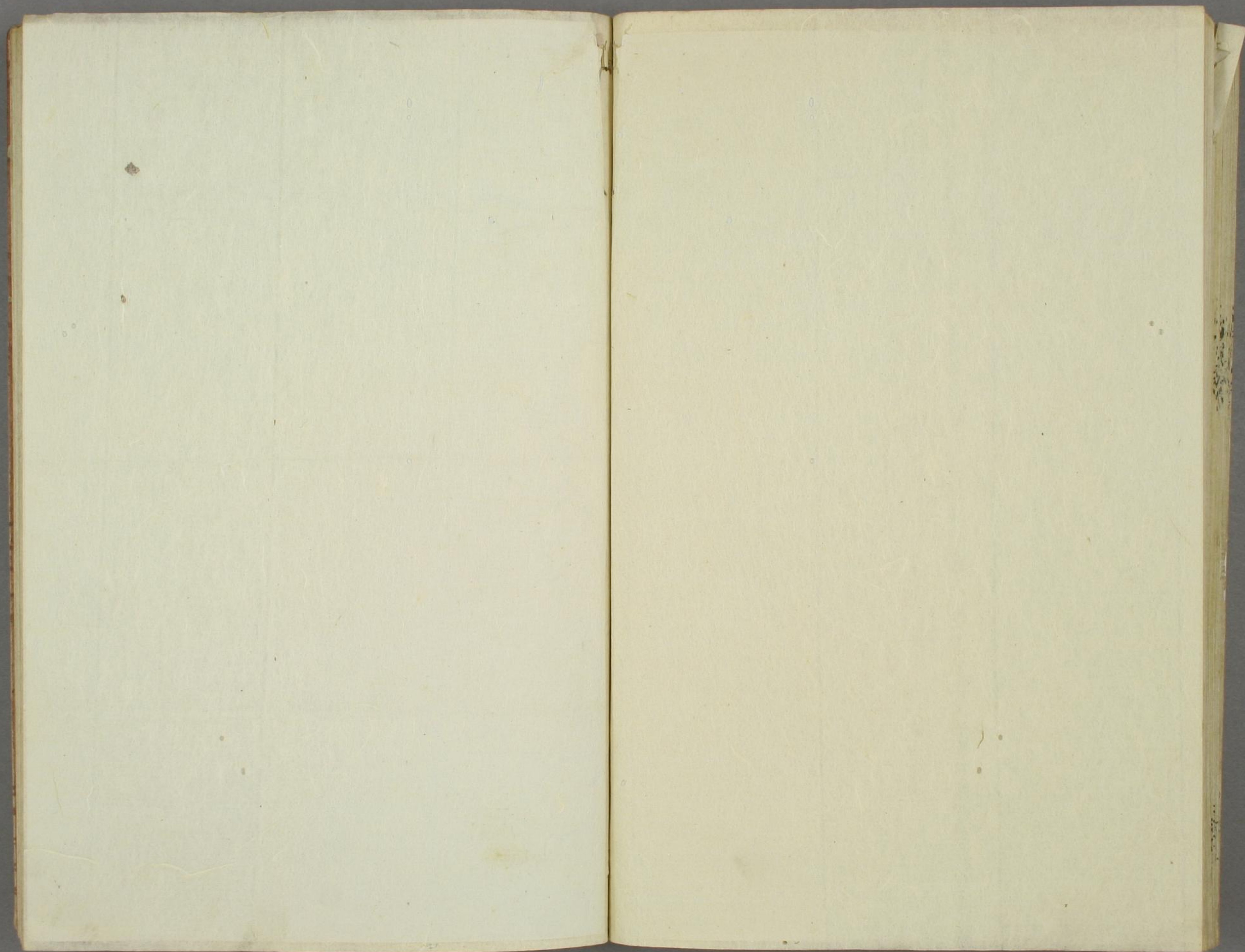
甲斐の

乃初

乃丹

まはるる

まはるる



天保三年

五月廿二日

書

此の書は、  
天保三年五月廿二日  
に書かれたるものなり。  
其の文は、  
天保三年五月廿二日  
に書かれたるものなり。  
其の文は、  
天保三年五月廿二日  
に書かれたるものなり。  
其の文は、  
天保三年五月廿二日  
に書かれたるものなり。  
其の文は、  
天保三年五月廿二日  
に書かれたるものなり。



天

清探をい中敷きし竹丸

見五(歩)ハ凡中よなるや今(の)補ニヨリ

りま(と)あ(り)ま(り)る(り)三(の)を(と)

く(り)ま(り)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

顔(筋)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

大(井)の(り)ま(り)の(り)ま(り)

たつたの春のふゆの秋の  
横河の一年のたつたの秋の  
たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の

たつたの秋の



Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a date or a reference.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or title.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.

Handwritten text in cursive script, likely a list or entry.



151 412 116 0

152 412 116 0

153 412 116 0

154 412 116 0

155 412 116 0

156 412 116 0

157 412 116 0

158 412 116 0

159 412 116 0

160 412 116 0

161 412 116 0

162 412 116 0

163 412 116 0

164 412 116 0

165 412 116 0

166 412 116 0

陣

ふかきや 陣のしるしをたてて 全隊のた

たてしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて  
陣のしるしをたてて 陣のしるしをたてて

陣

家々や賑ひしりんとて全路の花

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか  
花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

花のさかすか~~は~~のさかすか

しんとて全類のた

草むのうほ田よ

いんや旗のあやめ

草むしての

いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

そのいんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ  
いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

いんや旗のあやめ

第一 番の 番手 <sup>番手</sup> ...  
 番手 <sup>番手</sup> ...  
 番の 番手

番手 <sup>番手</sup> ...

番手 <sup>番手</sup> ...

...  
 ...  
 ...

...

...

...

...

...

...

...

...



— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

— 後 —

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title.

手紙の返事

お返しのしるしをいれたい

お返しのしるしをいれたい

返

お返しのしるしをいれたい



返



連

連



連

